

各関係機関団体の長
各病虫害防除員 } 殿

福岡県病虫害防除所長

平成22年度病虫害発生予報第6号(9月)について

このことについて、病虫害発生予報第6号を発表したので送付します。

予報第6号

向こう1か月間の主な病虫害の発生動向は、次のように予想されます。

トビイロウンカとカメムシ類の発生に注意しましょう!

本年は梅雨明け以降、高温・少雨傾向が続いています。現在のところ、主要な害虫の発生量は平年並ですが、今後も同様な天候が続くと予想されていますので、ほ場での発生状況には充分注意し、適期防除に心掛けて下さい。

1 水稻のトビイロウンカ

本年は、飛来回数・飛来量とも多く、発生ほ場率も平年よりやや多くなっています。

本種は地域やほ場により発生状況が異なるので、ほ場での発生状況を必ず確認してください。



5 齢幼虫



短翅成虫 ()



長翅成虫

2 果樹のカメムシ類(チャバネアオカメムシ等)

8月2半旬~盆にかけて朝倉以南の一部地域で、チャバネアオカメムシの予察灯での誘殺数が急増し、カキで被害が散見されています。

果樹カメムシ類の発生は全般的には少ない状況ですが、予察灯での誘殺数が多い地域では、今後も十分な注意が必要です。

カメムシ類は広範囲に移動しますので、防除は広域一斉に実施しましょう。



チャバネアオカメムシ

< 予想される向こう1か月の天候 >

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候は以下のとおりです。期間の前半は晴れの日が多く、期間の後半は数日の周期で変わってでしょう。

向こう1か月の平均気温は高いでしょう。

降水量と日照時間は平年並でしょう。

要素別確率

要素	低い(少ない)	平年並	高い(多い)
気温	10	30	60
降水量	30	40	30
日照時間	30	40	30

(福岡管区气象台 22年8月27日発表抜粋)

向こう1か月間の主な病害虫の発生动向は、次のように予想されます。

作物名	病害虫名	発 生 量 (予 想)		
		発生量 (現 況)	平年比	前年比
普通期水稻	いもち病 紋枯病 トビイロウンカ コブノメイガ 斑点米カメムシ類	並	並	並
		少	少	並
		やや多	やや多	やや多
		やや多	やや多	やや多
		並	並	並
大豆	ハスモンヨトウ 吸実性カメムシ類	並	並	並
		少	やや少	やや少
かんきつ	黒点病 ミカンハダニ	多	多	多
		並	並	並
かき	炭疽病 フジコナカイガラムシ	やや少	並	並
		並	並	並
果樹共通	カメムシ類	並	-	並
茶	炭疽病 もち病 輪斑病 カンザワハダニ チャノコカクモンハマキ チャノホソガ チャノミドリヒメヨコバイ チャノキイロアザミウマ	少	少	並
		並	少	並
		並	並	多
		多	多	多
		少	並	少
		少	少	並
		やや多	やや多	並
		並	やや多	やや少
イチゴ	炭疽病 ハダニ類	並	やや多	やや多
		並	並	並

注) 果樹カメムシの類の発生量 (現況) は前年比

作物別発生予報

注：予報の根拠の末尾の () 書きは、(+) は発生を助長する要因、(-) は発生を抑制する要因、(±) は発生の助長及び抑制に影響の少ない要因であることを示す。

【普通作物 - 水稻】

1 いもち病 (葉いもち・穂いもち)

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 8月5半旬調査の結果、葉いもちの発病ほ場率は平年よりやや多かった (+) が、発病株率は平年並であった (±)。

発病ほ場率 38.8% (平年 23.0%、前年 19.6%)

発病株率 4.2% (平年 3.6%、前年 2.6%)

イ 葉いもちの病斑は停滞型であった (-)。

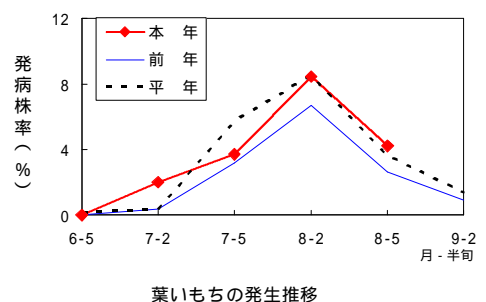
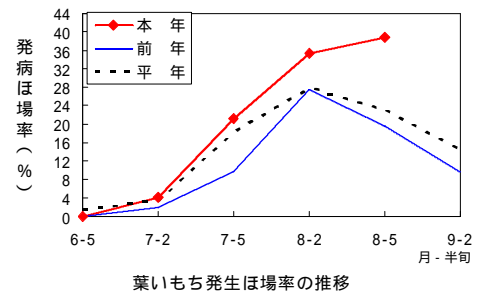
ウ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年より高く、降水量は平年並とされている (-)。

(3) 防除上の注意

ア 穂いもちに対する薬剤防除を実施する場合、剤型によって散布時期が異なるので注意する。

イ 粒剤を施用する場合は、散布後7日間止水する。

ウ 薬剤については「平成22年度普通作物病害虫・雑草防除の手引き」を参照する (以下の病害虫についても同様)。



2 紋枯病

(1) 予報の内容

発生量：平年より少、前年並

(2) 予報の根拠

ア 8月5日半旬調査の結果、発生量は平年より少なかった(-)。

発生ほ場率 24.5% (平年 46.3%、前年 25.5%)

発病株率 1.4% (平年 7.9%、前年 1.1%)

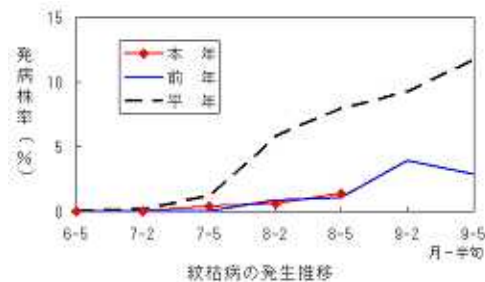
イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年より高く、降水量は平年並とされている(+)

(3) 防除上の注意

ア 出穂期以降も、病斑の上位進展が認められる場合は防除を行う。

イ 薬剤によって使用時期(収穫前日数)が異なるので、使用基準を確認する。

ウ 粒剤を施用する場合は、散布後7日間止水する。



3 トビロウソウ

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多、前年並

(2) 予報の根拠

ア 8月5日半旬調査の結果、発生ほ場率は平年よりやや多かった(+), 払い落とし成幼虫数は平年並であった(±)。

発生ほ場率 55.1% (平年 40.2%、前年 78.9%)

10株当たり払い落とし成幼虫数

1.2頭 (平年 1.4頭、前年 1.7頭)

イ 成虫の短翅型率は 62.5% であった(±)。

ウ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年より高いとされている(+)

(3) 防除上の注意

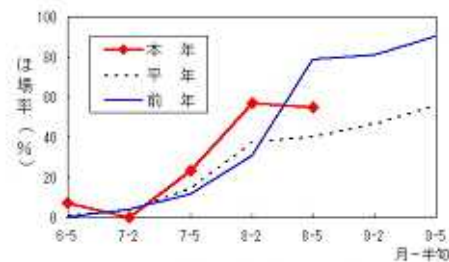
ア 本年は飛来回数及び飛来量ともに多い。本種の発生密度は地域やほ場毎に異なるので、ほ場での発生状況を必ず確認する。

イ 発生密度が要防除水準を超えた圃場では防除を実施する。

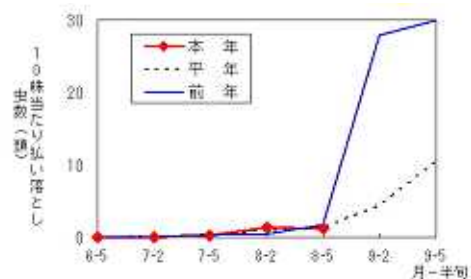
要防除水準：9月上旬～中旬の老齢幼虫及び成虫の合計密度が、1株当たり5頭。

ウ 収穫期が近づいていることから、薬剤散布に際しては収穫前日数に注意する。

エ 出穂後は薬剤が株元まで到達しにくくなるため、株元に確実に届くよう注意して散布する。



トビロウソウの発生ほ場率の推移



トビロウソウの発生密度の推移

4 コブノメイガ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや多

(2) 予報の根拠

ア 8月5日半旬調査の結果、発生量は平年よりやや多かった(+)

発生ほ場率

93.8% (平年 71.0%、前年 61.0%)

食害株率

30.3% (平年 17.5%、前年 6.8%)

30㎡払出し成虫数

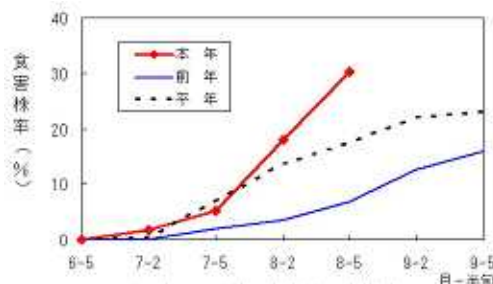
12.2頭 (平年 6.6頭、前年 2.9頭)

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年より高いとされている(+)

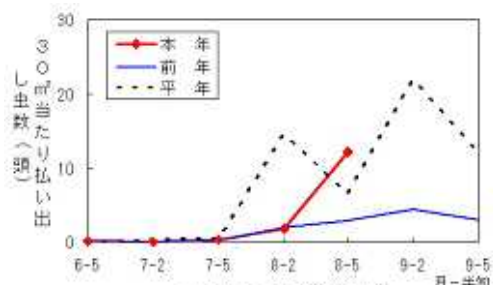
(3) 防除上の注意

ア コブノメイガの防除適期は、発蛾最盛期から1週間後である。

イ 成虫は窒素過多、遅植え等の葉色の濃いイネに集中して産卵するため、このようなイネでは発生状況に注意する。



コブノメイガの食害株発生推移



コブノメイガの発生推移

5 斑点米カメムシ類

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 8月5半旬調査（水田内及び雑草地の片振り20回すくい取り）の結果、発生量は平年並であった（±）。

主要3種カメムシ類（ケヘリカメムシ、ホリカメムシ、シラホカメムシ類）

本 田・発生ほ場率 18.6%（平年 21.5%、前年 19.5%）

成幼虫数 1.6頭（平年 0.7頭、前年 0.3頭）

雑草地・発生ほ場率 30.2%（平年 69.3%、前年 54.3%）

成幼虫数 2.1頭（平年 9.2頭、前年 5.8頭）

カスミカメムシ類

本 田・発生ほ場率 20.9%（平年 18.1%、前年 19.5%）

成幼虫数 1.3頭（平年 0.7頭、前年 0.8頭）

雑草地・発生ほ場率 40.0%（平年 53.1%、前年 51.4%）

成幼虫数 14.4頭（平年 26.0頭、前年 25.7頭）

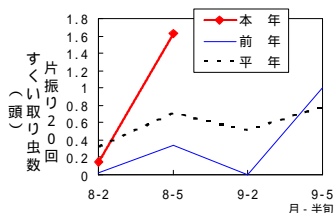
ミナミアオカメムシ

本 田・発生ほ場率 4.7%（過去7か年平均 2.5%、前年 2.4%）

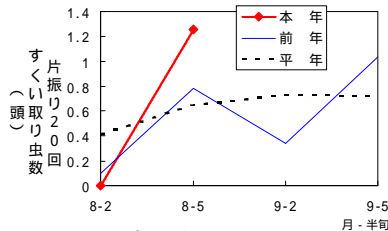
成幼虫数 0.19頭（過去7か年平均 0.09頭、前年 0.05頭）

雑草地・発生ほ場率 4.2%（過去7か年平均 1.5%、前年 2.9%）

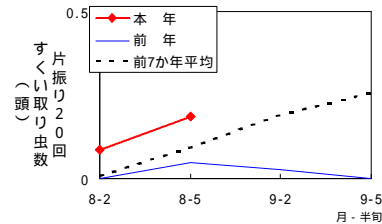
成幼虫数 0.04頭（過去7か年平均 0.02頭、前年 0.09頭）



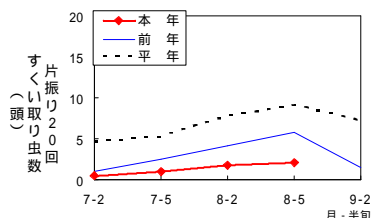
本田における主要3種（ケヘリ、ホリ、シラホ）カメムシの発生推移



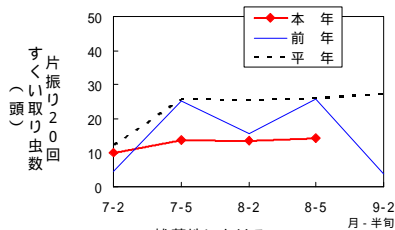
本田におけるカスミカメムシの発生推移



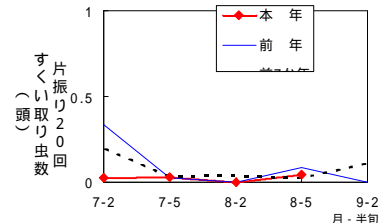
本田におけるミナミアオカメムシの発生推移



雑草地における主要3種（ケヘリ、ホリ、シラホ）カメムシの発生推移



雑草地におけるカスミカメムシの発生推移



雑草地におけるミナミアオカメムシの発生推移

イ 県下5地点の予察灯における8月1～5半旬の誘殺虫数は、ミナミアオカメムシは平年より少なかった（-）が、アサスジカスミカメは平年よりやや多かった（+）。

ミナミアオカメムシ 8頭（過去7か年平均 30.2頭、前年 63頭）

アサスジカスミカメ 870頭（平年 611.3頭、前年 426.9頭）

ウ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年より高いとされている（+）。

(3) 防除上の注意

ア 防除適期は穂揃期及びその7～10日後である。

カメムシ類は広範囲に移動するので、できるだけ広域一斉防除を実施する。

イ 防除が実施されたほ場においても、カメムシ類の再飛来には十分注意する。

穂揃期散布後の見取り調査で、斑点米カメムシ類の合計虫数が、100株当たり2～4頭を超える場合は、その7～10日後に補正防除を行う。

ウ ミナミアオカメムシに対しては、シラフルオフェン剤の防除効果が低いので、効果の高いクロチアニジン剤または、ジノテフラン剤を使用する。

【普通作物 - 大豆】

1 ハスモンヨトウ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 8月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった(±)。

発生ほ場率 62.5% (平年 61.1%、前年 72.2%)
25株当たり幼虫数 19.4頭
(平年 17.8頭、前年 15.8頭)

イ フェロモントラップにおける8月1～5半旬の合計

誘殺虫数は、地域によって異なる(±)。

筑紫野市 1,326頭 (平年 874.7頭、前年 307.7頭)

柳川市 1,302頭 (前年 1,201頭)

行橋市 97頭 (前年 1,193頭)

ウ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年より高く、降水量は平年並とされている(+)

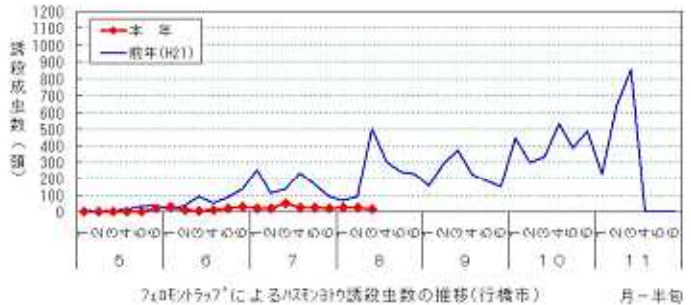
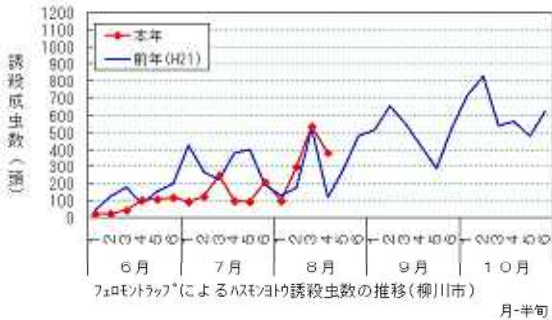
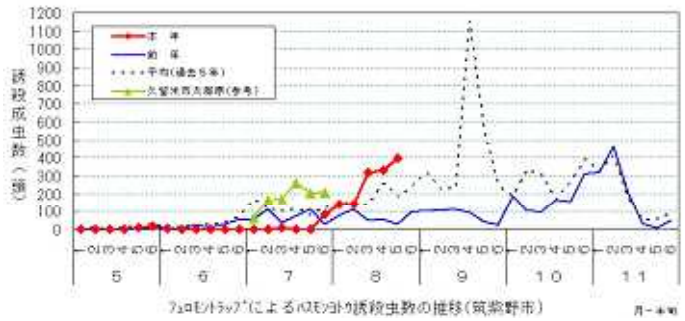
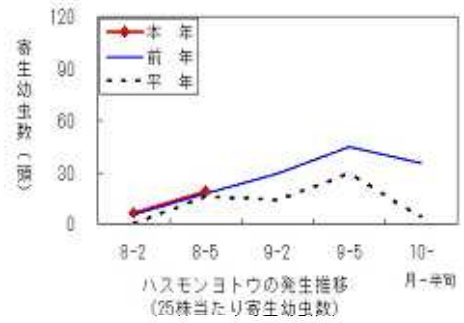
(3) 防除上の注意

ア 分散前の若齢幼虫が群棲している白変葉は、見つけ次第除去する。

イ 薬剤散布は、効果が高い若齢幼虫期に実施する。

ウ 防除適期はフェロモントラップの誘殺ピークから10日目頃であるが、地域によって発生に差があるため、白変葉の発生状況を必ず確認する。

エ 近隣にフェロモントラップが設置されていない場合は、病害虫防除所ホームページのフェロモントラップの誘殺状況(筑紫野市、柳川市、行橋市)を参考にする。



2 吸実性カメムシ類

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや少

(2) 予報の根拠

ア 8月5半旬調査の結果、発生量は平年より少なかった(-)。

主要3種カメムシ類(アオカメシ、イモシカメシ、ホソカメシ)

発生ほ場率 0% (平年 11.3%、前年 5.6%)

25株当たり成幼虫数 0頭 (平年 0.22頭、前年 0.06頭)

ミナミアオカメムシ

発生ほ場率 0% (平年 1.4%、前年 0%)

25株当たり成幼虫数 0頭 (平年 0.04頭、前年 0頭)

イ 県内5地点の予察灯における8月1～5半旬のミナミアオカメムシの誘殺虫数は、8頭(過去7か年平均 30.2頭、前年 63頭)で、過去7か年平均より少なかった(-)。

ウ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年より高いとされている(+)

(3) 防除上の注意

ア 防除適期は開花期後30日前後である。多発生の場合は7～10日後にも防除を行う。

なお、生育状況については、地域やほ場毎に異なるので注意する。

イ カメムシ類は広範囲に移動するので、広域一斉防除の効果が高い。

ウ ミナミアオカメムシに対しては、シラフルオフェン剤の防除効果が低いので、薬剤の選定には注意する。

【普通作：その他の病害虫】

作物名 病害虫名	発生量 (現況)	発生量 (予想)		防除上注意すべき事項等
	平年比	平年比	前年比	
水稲 縞葉枯病	多	-	-	・ヒメトビウンカは、収穫後のイネ刈株等で越冬するので、収穫後はすみやかに刈株をすき込む。

【果樹】

1 かんきつ黒点病

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年より多

(2) 予報の根拠

ア 8月5半旬調査の結果、発生量は平年より多かった(+)。

発病果率 9.0% (平年 4.5%、前年 1.5%)

発生ほ場率 88.0% (平年 47.4%、前年 36.4%)

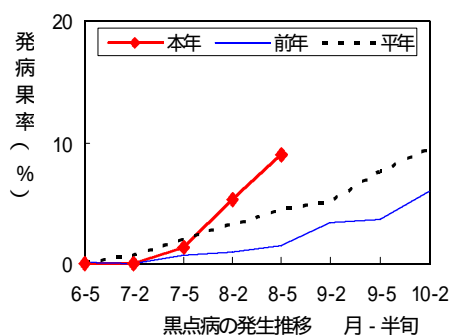
イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年より高く、降水量は平年並とされている(±)。

(3) 防除上の注意

ア 伝染源である枯枝は除去・処分する。

イ 前回の防除から25日後又は積算降水量250mmになった時点を目安にし、降雨前の予防散布を徹底する。

ウ 早生種は収穫期に入るので、防除に当たっては農薬使用基準を確認し、薬剤の選定に注意する。



2 かんきつのミカンハダニ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 8月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった(±)。

寄生葉率 12.6% (平年 16.3%、前年 27.1%)

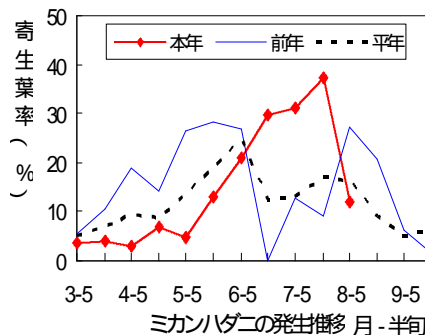
発生ほ場率 90.0% (平年 69.8%、前年 81.8%)

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年より高く、降水量は平年並とされている(+)

(3) 防除上の注意

ア 薬液が葉裏に十分かかるよう丁寧に散布する。

イ 薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統薬剤の連用を避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。



3 かき炭疽病

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 8月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや少なかった(-)。

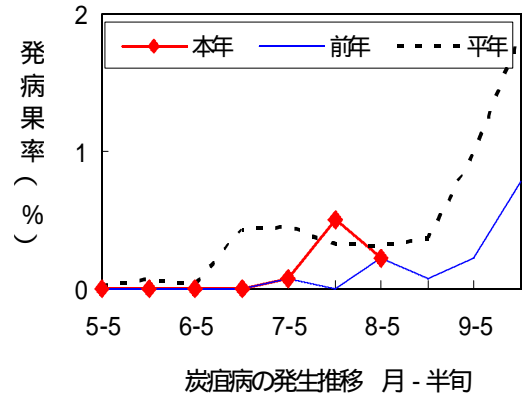
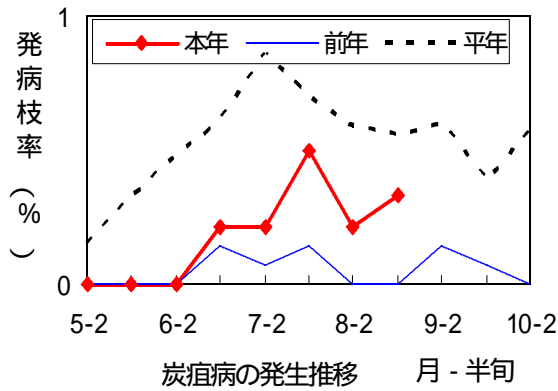
発病枝率 0.4% (平年 0.6%、前年 0%)

発生ほ場率 21.4% (平年 17.9%、前年 0%)

発病果率 0.1% (平年 0.3%、前年 0.2%)

発生ほ場率 8.3% (平年 22.9%、前年 21.4%)

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年より高く、降水量は平年並とされている(±)。



(3) 防除上の注意

- ア 伝染源である罹病枝や罹病果は除去・処分する。
- イ 台風等の強風雨が予想される場合や、罹病枝の多い園、本病に弱い品種（早秋）では、薬剤防除を徹底する。
- ウ 樹冠内部の徒長枝に発病し易いので、樹冠内部に薬液が十分かかるよう丁寧に散布する。
- エ 早生種は収穫期に入るので、防除の際は農薬使用基準を確認し、薬剤の選定に注意する。

4 かきのフジコナカイガラムシ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 8月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった(±)。

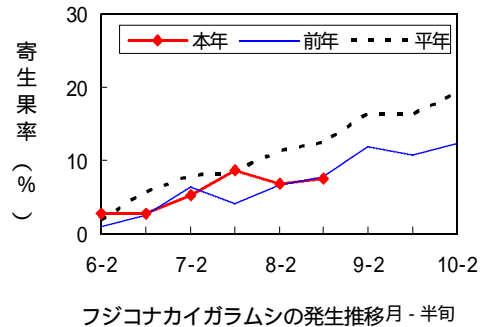
寄生果率 7.4%(平年 12.5%、前年 7.7%)

発生ほ場率 83.3%(平年 87.7%、前年 92.9%)

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年より高く、降水量は平年並とされている(±)。

(3) 防除上の注意

本種はヘタのすき間や葉と重なった果実表面に寄生しているので、薬液が十分かかるよう丁寧に散布する。



5 果樹共通のカメムシ類

(1) 予報の内容

発生量：前年・前々年並

(2) 予報の根拠

ア 県下4か所（筑紫野市、うきは市、久留米市、八女市）の予察灯における8月1～5半旬の主要3種カメムシの合計誘殺数は10,251頭（前年4,463頭、前々年9,923頭）と前年より多く、前々年並であった(+)。

イ 県下24か所における8月5半旬のヒノキ球果のビ-ティング調査では、主要3種（チャバネアオカメムシ、ツヤアオカメムシ、クサギカメムシ）の寄生虫数は平均9.3頭/か所（前年9.1頭、前々年24.0頭）で、前年並で、前々年より少なかった(表1)(±)。

ウ 県下23か所における8月5半旬のヒノキ球果の口針鞘数調査の結果、筑後支所管内は平均28.0本/球果で、離脱する目安とされる25本を超えており、一部の果樹園で、盆頃に飛来が見られている(表1)。

本所管内の口針鞘数には地域差(1.4本～20.0本)があり、口針鞘数が比較的多い地域では、一部の果樹園で、盆頃に飛来が見られカキに被害が出ている。

(3) 防除上の注意

ア チャバネアオカメムシの予察灯での誘殺数は県南部地域で8月2～3半旬、県北部地域で8月4～5半旬頃から増加しており(図1)、一部の果樹園で飛来が確認されているので、園内外を見回り、早期発見に努める。

イ カメムシ類は広範囲に移動するため、広域一斉防除の効果が高い。

ウ 樹種によって使用可能な薬剤が異なるので、使用基準や使用回数等を遵守する。

エ 最新の果樹カメムシ類の発生状況については、病害虫防除所ホームページを参照する。

表1 ヒノキ球果の口針鞘数及びヒノキのピーティング調査によるカメムシ類の虫数

2010 調査時期：8月5半旬

調査場所	口針鞘数調査		ピーティング調査(頭)														3種の合計		
	ヒノキ球果		チャバネアオカメムシ							ツヤアオカメムシ			クサギカメムシ						
	被害球果率(%)	口針鞘数(本)	成虫数	幼虫数					計	成虫数	幼虫数	計	成虫数	幼虫数	計				
			1令	2令	3令	4令	5令	計											
行橋	岡垣町上畑	40	0.4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	岡垣町戸切	45	0.9	24	0	1	0	3	0	4	28	1	0	1	0	0	0	0	29
	みやこ町犀川町木山	-	-	1	0	0	0	1	0	1	2	0	0	0	0	0	0	0	2
	上毛町唐原	15	0.3	0	0	0	0	1	0	1	1	0	0	0	1	0	0	1	2
	築上町妻田	50	0.9	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	築上町本庄	33	1.0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	行橋支所平均(6か所)	37	0.7	4.2	0.0	0.2	0.0	0.8	0.0	1.0	5.2	0.2	0.0	0.2	0.2	0.0	0.2	5.5	
本所管内	宗像市山田	100	13.3	10	0	0	0	0	0	10	0	0	0	0	0	0	10		
	前原町高祖	80	3.2	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	1		
	古賀市青柳	90	5.4	3	0	7	2	7	1	17	20	0	0	0	0	0	20		
	庄内町入水	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
	久留米市田主丸町益生田	100	20.0	8	0	2	2	0	0	4	12	2	1	3	0	0	15		
	久留米市田主丸町森部	95	15.6	3	0	1	1	4	1	7	10	0	0	0	0	0	10		
	うきは市浮羽町小塩	100	14.0	6	0	0	0	0	2	2	8	2	0	2	0	0	10		
	朝倉市柘原	70	1.9	4	0	0	0	0	0	4	8	0	8	0	0	0	12		
	朝倉市屋形原	50	1.4	0	0	0	1	0	0	1	1	1	0	1	0	1	3		
	朝倉市宮野	100	8.4	1	0	1	0	0	4	5	6	0	0	0	0	0	6		
	朝倉市須川	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
朝倉市杷木町志波	90	4.3	5	0	0	1	1	4	6	11	4	0	4	0	0	15			
本所平均(10か所)	88	8.8	4.0	0.0	1.1	0.7	1.2	1.3	4.3	8.3	1.7	0.1	1.8	0.0	0.1	0.1	10.2		
筑後支所管内	太宰府市内内	100	28.5	10	0	2	1	0	0	3	13	0	0	0	0	0	13		
	みやま市山川町立山	100	29.4	3	0	0	1	1	1	3	6	0	0	0	0	0	6		
	八女市立花町白木	100	33.0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0		
	八女市立花町飛形山	100	27.2	13	0	0	0	0	3	3	16	4	0	4	1	0	21		
	八女市黒木町野田山	100	17.3	6	0	0	0	0	1	1	7	0	0	0	0	0	7		
	八女市黒木町合	100	36.3	4	0	0	0	1	2	3	7	3	1	4	0	0	11		
	広川町橋	100	25.8	9	0	4	1	0	1	6	15	1	4	5	0	1	21		
	八女市宅間田	100	26.1	3	0	6	1	0	0	7	10	0	0	0	0	0	10		
筑後支所平均(8か所)	100	28.0	6.0	0.0	1.5	0.5	0.3	1.0	3.3	9.3	1.0	0.6	1.6	0.1	0.1	0.3	11.1		
県内平均(24か所)	80.8	13.7	4.7	0.0	1.0	0.5	0.8	0.9	3.1	7.8	1.1	0.3	1.3	0.1	0.1	0.2	9.3		
チャバネアオカメムシの年齢構成	県内平均(%)	60.1	0.0	12.8	5.9	10.1	11.2	39.9	100	成・幼虫比(%)	成	幼虫比(%)	成	幼虫比(%)					
	筑後支所管内平均(%)	64.9	0.0	16.2	5.4	2.7	10.8	35.1	100	81.3	18.8	100	50.0	50.0	100				
H21	99.7	20.1	3.8	0.0	0.7	0.7	1.2	1.5	4.1	7.9	1.0	0.2	1.2	0.0	0.0	0.0	9.1		
H20	95.0	16.9	10.1	0.3	0.8	1.3	1.2	1.0	4.6	14.7	6.4	2.1	8.6	0.3	0.1	0.5	24.0		
H19	90.0	15.5	1.3	0.3	0.6	0.4	1.0	0.6	2.8	4.0	0.3	1.0	1.3	0.1	0.0	0.1	5.4		
H18	98.2	19.1	8.6	0.0	0.2	0.4	1.1	1.7	3.3	11.9	2.1	0.7	2.7	0.1	0.1	0.3	14.9		

注1) 口針鞘数調査は1地点当たり20球果、口針鞘数は20球果の平均である。

注2) ピーティング調査は、1地点5枝、1枝当たり5回のたたき落として、その合計虫数である。

注3) チャバネアオカメムシの卵から次世代の成虫になるまでの期間は、夏期の温度では約30~40日である。

注4) 行橋市ヒノキ球果調査5地点・ピーティング調査地点6地点

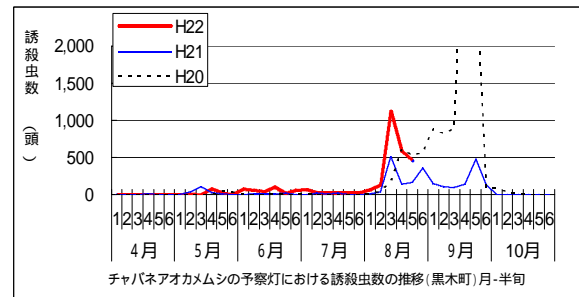
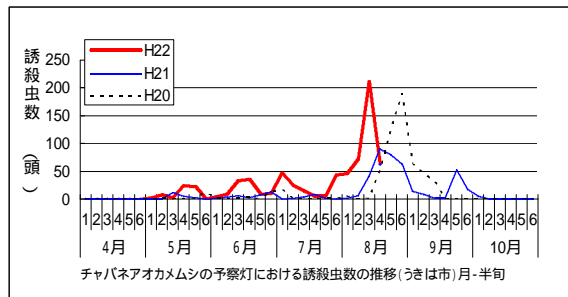
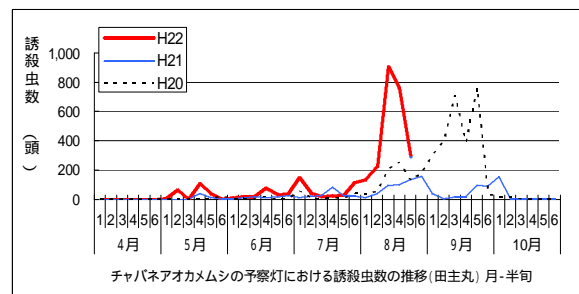
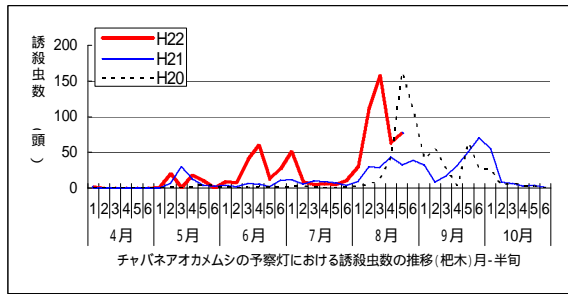
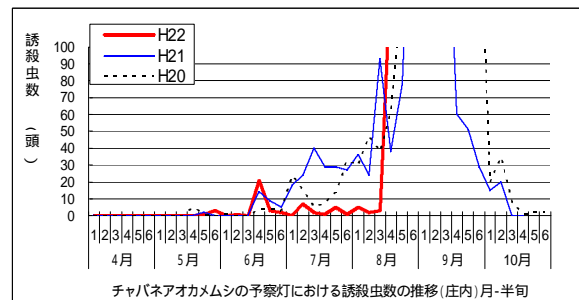
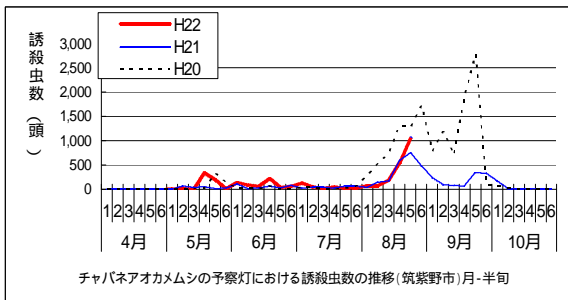


図1 県下6地点の予察灯におけるチャバネアオカメムシの誘殺状況

【果樹：その他の病害虫】

作物名 病害虫名	発生現況	発生予報		防除上注意すべき事項等
	平年比	平年比	前年比	
かき うどんこ病	少	少	並	<ul style="list-style-type: none"> ・ 防除に当たっては、薬液が葉裏に十分かかるよう丁寧に散布する。 ・ 防除に当たっては、幼虫は葉が重なった部分や、ヘタと果実の間に多く潜んでいるため、薬液を高圧で十分量散布する。
ハマキムシ類	やや少	並	並	

【茶】

1 炭疽病

(1) 予報の内容

発生量：平年より少、前年並

(2) 予報の根拠

ア 8月5半旬調査の結果、発生量は平年より少なかった(-)。

発病葉数 0.1葉(平年 0.6葉、前年 0.6葉)
発生ほ場率 11.1%(平年 22.4%、前年 44.4%)

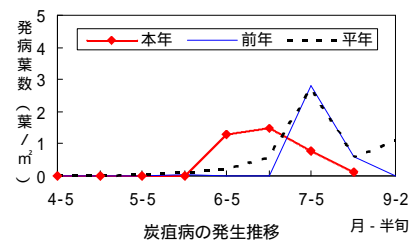
イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年より高く、降水量は平年並とされている(±)。

(3) 防除上の注意

ア 整枝後等の残葉での発生に注意し、萌芽から1葉期までに防除を行う。特に秋芽に対する防除を徹底する。

イ 雨滴により胞子が飛散伝搬するので、降雨前の防除効果が高い。

ウ 薬剤感受性低下を避けるため、同一系統薬剤の連続散布を避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。



2 もち病

(1) 予報の内容

発生量：平年より少、前年並

(2) 予報の根拠

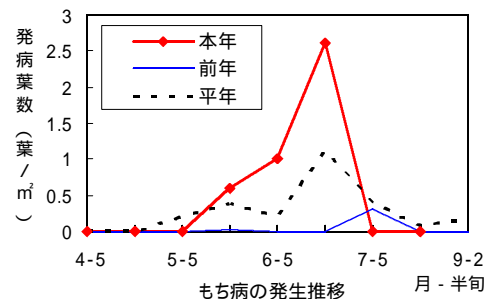
ア 8月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった(±)。

発病葉数 0葉(平年 0.09葉、前年 0葉)
発生ほ場率 0%(平年 2.3%、前年 0%)

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年より高く、降水量は平年並とされている(-)。

(3) 防除上の注意

降雨が多いと感染し発病しやすくなるため、発生の恐れがある園では萌芽から1葉期までに防除を行う。



3 輪斑病

(1) 予報の内容

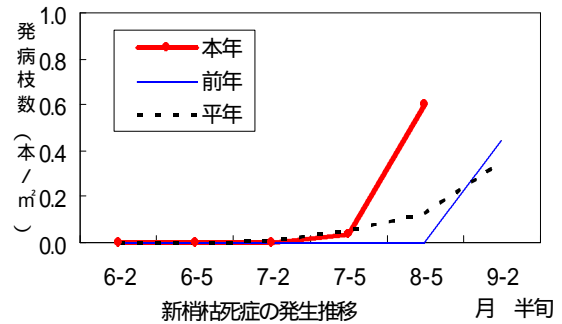
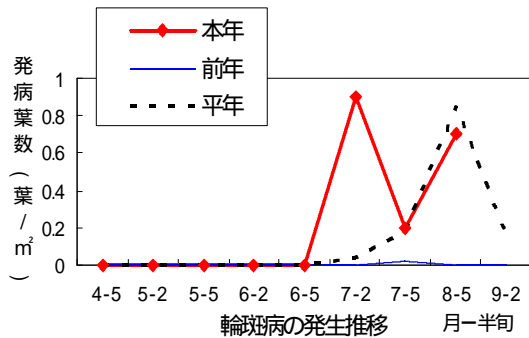
発生量：平年並、前年より多

(2) 予報の根拠

ア 8月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった(±)。

発病葉数 0.7葉(平年 0.9葉、前年 0葉)
発生ほ場率 16.7%(平年 9.6%、前年 0%)

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年より高く、降水量は平年並とされている(±)。



(3) 防除上の注意

- ア 病原菌は、整枝後等の葉や茎の傷口から侵入感染するため、夕立ち等の降雨による感染に注意する。
- イ 台風等の強い風雨の後では、感染が急速に拡大する場合がありますので、降雨後速やかに（翌日までに）防除を行う。
- ウ 本病の発生園では新梢枯死症も発生しやすく、8月5半旬調査の結果では増加傾向にあり今後の発生に注意する。

4 カンザワハダニ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年より多

(2) 予報の根拠

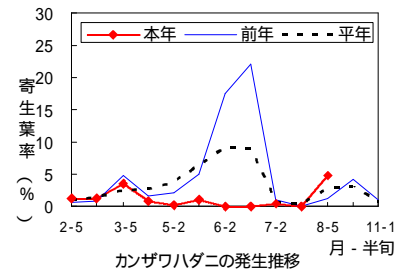
ア 8月5半旬調査の結果、発生量は平年より多かった(+).

寄生葉率 4.7% (平年 2.7%、前年 1.2%)

50葉当たり虫数 4.8頭 (平年 6.4頭、前年 0.7頭)

発生ほ場率 50.0% (平年 35.9%、前年 33.3%)

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年より高く、降水量は平年並とされている(+).



(3) 防除上の注意

- ア 一部多発園が見られることから、園の発生状況をよく観察し、寄生葉率が2%以上である場合は速やかに防除を行う。
- イ 薬剤感受性低下を避けるため、同一系統薬剤の連続散布を避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。

5 チャノコカクモンハマキ

(1) 予報の内容

発生量：平年並、前年より少

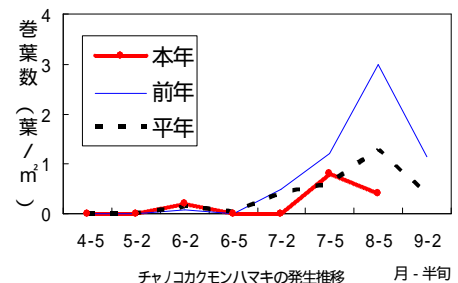
(2) 予報の根拠

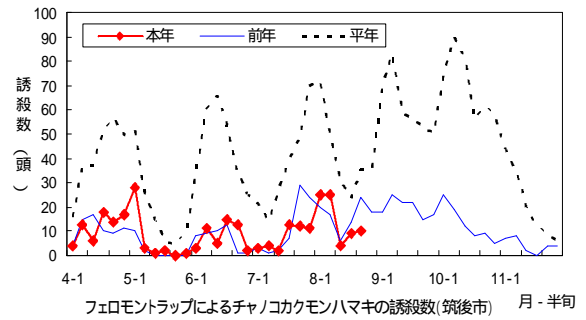
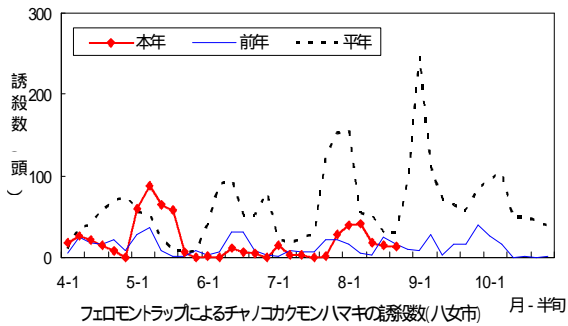
ア 8月5半旬調査の結果、発生量は平年より少なかった(-).

被害葉数 0.4葉 (平年 1.3葉、前年 3.0葉)

発生ほ場率 16.7% (平年27.9%、前年33.3%)

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年より高く、降水量は平年並とされている(+).





(3) 防除上の注意

ア 第3世代成虫の発蛾最盛期は、9月上旬頃と予想されるので、ほ場での成虫の発生に注意し、成虫が最も多いときから7日後を目安に防除を行う。

イ 巻葉後は防除効果が劣るため、巻葉が見られたら直ちに防除を行う。

6 チャノホソガ

(1) 予報の内容

発生量：平年より少、前年並

(2) 予報の根拠

ア 8月5半旬調査の結果、発生量は平年より少なかった(-)。

被害葉数 0葉(平年 1.5葉、前年 1.5葉)

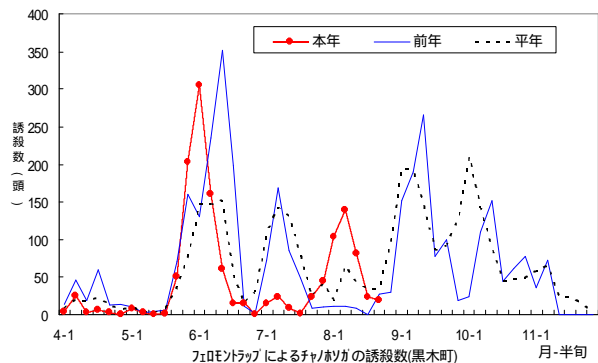
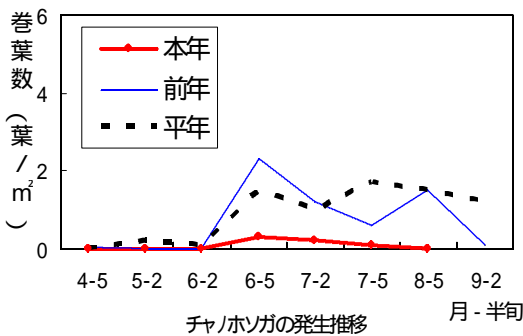
発生ほ場率 0%(平年 30.2%、前年 27.8%)

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年より高く、降水量は平年並とされている(+)

(3) 防除上の注意

ア 第4世代成虫の発蛾最盛期は、9月上旬頃と予想されるので、ほ場での成虫の発生に注意し、成虫が最も多いときから7日後を目安に防除を行う。

イ 巻葉後は防除効果が劣るため、巻葉が見られたら直ちに防除を行う。



7 チャノミドリヒメヨコバイ

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多、前年並

(2) 予報の根拠

ア 8月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや多かった(+)

たたき落とし虫数

0.8頭(平年 0.6頭、前年 0.6頭)

発生ほ場率

61.1%(平年 44.9%、前年 50.0%)

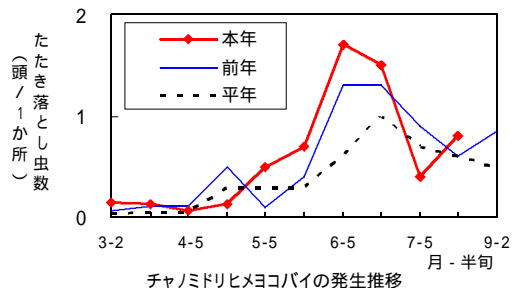
イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年より高く、降水量は平年並とされている(-)

(3) 防除上の注意

ア たたき落とし(A4版白紙上)で4頭以上発生している場合は防除を行う。

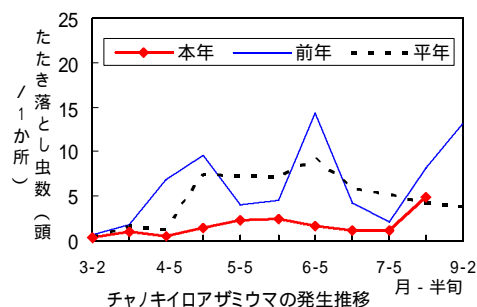
イ 新芽の萌芽から開葉期を重点に防除する。

ウ 効果が高い薬剤が少ないので、多発する前に防除する。



8 チャノキイロアザミウマ

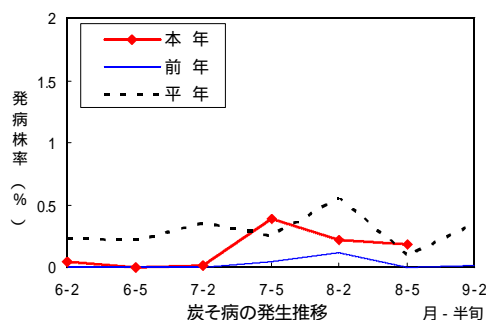
- (1) 予報の内容
発生量：平年よりやや多、前年よりやや少
- (2) 予報の根拠
ア 8月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった(±)。
たたき落とし虫数
4.8頭(平年 4.2頭、前年 8.1頭)
発生ほ場率
88.9%(平年89.9%、前年 100%)
イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年より高く、降水量は平年並とされている(+)
- (3) 防除上の注意
ア たたき落とし(A4版白紙上)で10頭以上発生している場合は防除を行う。
イ 新芽の萌芽から開葉期を重点に防除する。



【野菜】

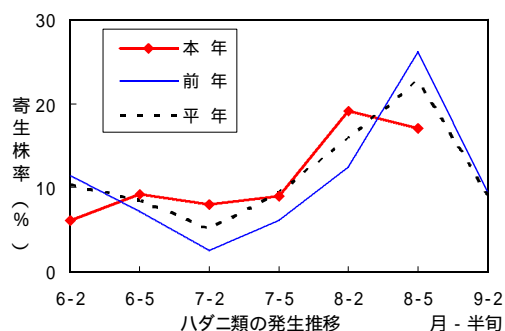
1 イチゴ(育苗期)の炭疽病

- (1) 予報の内容
発生量：平年・前年よりやや多
- (2) 予報の根拠
ア 8月5半旬調査の結果、発生量は過去6か年平均並であった(±)。
発病株率 0.18%
(過去6か年平均 0.09%、前年 0.0%)
イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年より高く、降水量は平年並とされている(+)
- (3) 防除上注意すべき事項
ア 罹病苗、感染が疑わしい苗、及びその周辺苗は除去、処分する。
イ 苗の選別には注意し、感染の可能性がある生育不良株は定植しない。
ウ 定植後の枯死株は周囲の土ごと掘り取り、残渣を残さないようにして、ほ場外に持ち出し処分する。
エ ビニルの被覆までは、ハウス内で新たに感染する恐れがあるので、定期的に防除を行う。
オ 雨よけビニル及び寒冷紗被覆をしているほ場では風通しを良くする。



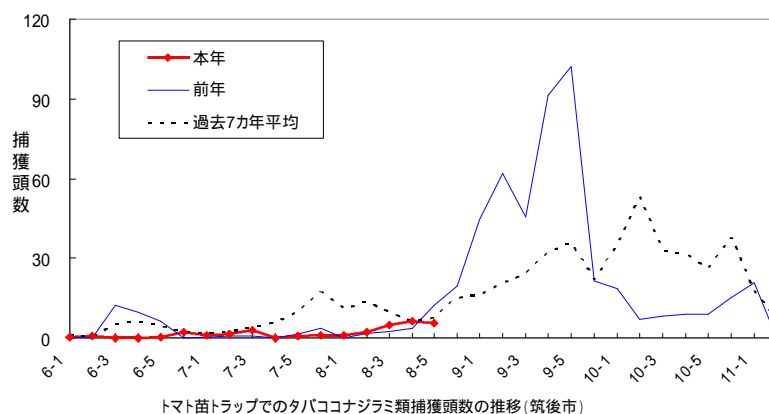
2 イチゴ(育苗期)のハダニ類

- (1) 予報の内容
発生量：平年・前年並
- (2) 予報の根拠
ア 8月5半旬調査の結果、発生量は過去6か年平均並であった(±)。
寄生葉率 17.1%
(過去6か年平均 22.6%、前年 26.0%)
イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年より高く、降水量は平年並とされている(+)
- (3) 防除上注意すべき事項
ア 多発後は防除が困難になるので、初期防除を徹底する。
イ 定植前に、苗のハダニの有無を確認し、ハウス内へ持ち込まない。
ウ 摘葉した葉はハウス内に放置せず、ビニル袋等に入れ密封し、持ち出して処分する。
エ 天敵を利用する場合、育苗後半～定植前は、天敵類へ悪影響がある有機リン系、カーバメイト系、合成ピレスロイド系、ピラゾール系の薬剤は使用しない。
オ ハウス内や周辺の除草を徹底する。



【野菜：その他の病害虫】

作物名 病害虫名	発生量 (現況)	発生量 (予想)		防除上注意すべき事項等
	平年比	平年比	前年比	
イチゴ うどんこ病	並	並	並	・伝染源である罹病葉や古葉は出来るだけ除去し、ほ場外に持ち出し処分する。
アスパラガス 斑点性病害	並	並	並	<ul style="list-style-type: none"> ・発生初期の薬剤防除を徹底する。 ・過繁茂にならないよう摘葉を行い、ハウス内の通風をよくする。 ・ハウス内や周辺の除草を徹底する。 ・早期発見に努め、若齢幼虫のうちに防除を徹底する。
アザミウマ類	並	並	並	
チョウ目害虫 (ハスモンヨトウ、 材外コガ)	やや少	やや少	やや少	
野菜共通 ハスモンヨトウ	やや少	やや少	やや少	<ul style="list-style-type: none"> ・若齢幼虫は群生しているため、かすり状の葉を見つけ次第、除去・処分する。 ・今後の発生状況については、病害虫防除所のホームページを参照のこと（以下の害虫についても同様）。 ・薬剤防除は、孵化直後の幼虫を対象に実施する。 ・本虫はトマト黄化葉巻病やキュウリ退緑黄化病の媒介虫である。 ・防虫ネット（0.4mm目合い以下）を設置し、育苗ポットでの粒剤処理と定期的な薬剤散布等、体系的な防除を実施する。
オオタバコガ	並	並	並	
コナジラミ類	並	並	並	



農薬の適正・安全使用、飛散防止対策の徹底を！

福岡県では、農薬の安全かつ適正な使用及び保管管理、使用現場における周辺への配慮を周知徹底するとともに、農薬による事故を防止することを目的として、安全使用講習会の開催や啓発チラシの配布等を、関係機関、団体と一体となって取り組んでいます。

散布者の安全はもちろん、人畜・隣接作物・河川等への配慮について、ご指導をお願いします。

1 農薬適正使用の徹底

適用作物、使用量や濃度、使用時期、総使用回数などの ラベルをよく確認し、使用基準を遵守する。

農薬の種類によっては、（例：スミチオン水和剤40）登録がとれている作物がメーカーによって異なるので、ラベルをよく確認する。

水田において農薬を使用するときは、散布後3～4日間たん水状態を保ち、散布後7日間は落水・かけ流しをしない。

2 飛散防止対策の徹底

風、散布方向、散布時間、散布圧などに留意する。

飛散しにくい農薬（剤型）や飛散が少ないドリフトレスノズルを使用する。

散布ほ場周辺の収穫前の作物には十分注意する。

3 保護具の着用

農薬の散布時には、ラベルの注意・警告マークをよく確認し、マスク、保護メガネ、ゴム手袋等を着用する。

4 農薬の散布後は、必ず散布器具を洗浄

噴霧器、薬液タンク、ホースなどの散布器具を十分に洗浄する

5 防除履歴の記帳

薬剤散布が終わったら、作物名、ほ場の場所、散布年月日、薬剤名、使用濃度、散布量等を正確に記帳する。

6 空容器の処分

空容器は、産業廃棄物処理業者に委託するなど、適切な処分を行う。また、野焼きは法令で禁止されている。

病害虫防除所では、病害虫の発生状況と防除についてホームページでお知らせしています。

ホームページ <http://www.jpjn.ne.jp/fukuoka>
電子メール kfok0301@sp.jpjn.ne.jp

